みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

民博通信 Online no.4; 表紙,目次ほか

メタデータ	言語: Japanese 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2021-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009845

みんぱく
つうしん
オンライン

民博通信

Online

No.4
2021



国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

民博通信

— Online —

No.4
2021

『民博通信 Online』について

国立民族学博物館は、文化人類学や民族学研究のセンターとして、世界の諸民族の社会や文化の研究を進めるとともに、その成果を出版などのかたちで発信しています。

現在、本館では、人間文化の新たな価値体系の創出を目指す「基幹研究プロジェクト」、現代の人類社会が直面する課題の分析を目的とする「特別研究」、特定のテーマについて館内外の研究者と一緒に研究を進める「共同研究」などをおこなっています。

『民博通信 Online』は、本館において実施している個々の研究プロジェクトについて、その学術的な特色や独創的な点、導きだされた成果などを、研究者や一般の方々にわかりやすく発信する雑誌です。

表紙写真

路上で売られている呪物（インド・マハーラーシュトラ州、詳細は本誌20-21頁）。

CONTENTS

特別インタビュー
吉田憲司館長

ついに来た「民博の時代」！？
―これまでの6年、これからの6年 ―― 4

Final report

基幹研究 ミクロネシア文化資料のフォーラム型データベースの構築―20世紀前半収集資料を中心として

ミクロネシア標本資料の歴史的文脈化と文化遺産としての継承
林勲男 ―― 16

基幹研究 時代玩具コレクションの公開プロジェクト

時代玩具コレクションデータベースの概要について
日髙真吾 ―― 18

共同研究 文化人類学を自然化する

わたしたちは文化人類学を自然化できたのか
中川敏 ―― 20

新刊の紹介 ―― 22

国立民族学博物館の研究 ―― 26

新刊の紹介

本館では、館外での出版物を奨励する制度があります。★の印は、その制度を利用して刊行された出版物です。タイトルをクリックすると詳細情報に移動します。



野生性と人類の論理 ★

―ポスト・ドメスティケーションを捉える4つの思考

卯田 宗平 編

定価：8,580円（税込） 400頁 東京大学出版会
2021年4月26日刊行

人類にとって動植物の野生性とは何か。本書は、養蜂や鷹狩り、狩猟、鵜飼、水田植物、タケ、イベリコブタ、腸内細菌、アユ、ドジョウなど身近な事例に着目し、人類による動植物の野生性利用を4つに類型化することで新たな解釈枠組みを示した。これまで欧米の研究者らは、動植物の家畜化や栽培化の事例から、対象を社会にとりこむ技術を議論してきた。一方、本書では、逆に動植物をとりこまない、とりこみすぎない事例にも着目し、その実態を初めて体系化した。今後の議論のたたき台になれば編者としてうれしい。



宗教性の人類学 ★

―近代の果てに、人は何を願うのか

長谷 千代子・別所 裕介・川口 幸大・藤本 透子 編

定価：4,400円（税込） 420頁 法藏館 2021年3月30日刊行

本書は、国立民族学博物館共同研究の成果論文集である。現代世界における宗教のあり方に新しい光をあてるべく、宗教か宗教でないか、人びとの見解が分かれるような現象に着目している。人類学的宗教研究をめぐる理論的考察のほか、中国、カザフスタン、スロヴァキア、イギリスなど各地の事例研究と、日本にまつわる事例を合わせ鏡のように配し、宗教イメージの輪郭が、世界的な歴史の変化とともに揺れ動く様を捉えた。そこから浮き彫りになるのは、その背景にある、人びとの宗教的願いの模索の姿である。

会計学と人類学の
トランスフォーマティブ研究 ★

出口 正之・藤井 秀樹 編

定価：3,850円（税込） 336頁 清水弘文堂書房
2021年2月26日刊行

本書は人類学者と会計学者による、国立民族学博物館の共同研究および科研費挑戦的研究（開拓）の研究成果である。学問のタコつぼ化打破が叫ばれて久しいが、「トランスフォーマティブ研究」とはグローバル化を挟んで対極に位置するかのような会計学と人類学の融合によって、ジンバブエのハイパー・インフレ、パプアニューギニアの貝貨取引、非営利組織の会計基準などが俎上にあげられ、会計公準そのものも揺るがしている。ブック・ローンチ・ビデオとの連動も面白い。



継承される地域文化
―災害復興から社会創発へ

日髙 真吾 編

定価：4,730円（税込） 380頁 臨川書店 2021年3月31日刊行

多発する大規模災害により再編を余儀なくされる地域社会において、地域文化はどのような役割を果たすのか。本書は地域住民とともに、地域文化を再発見し、保存し、活用するという実践研究から読み解く試みである。そして、「文化を未来へ継承するために、保存と活用の両立を図る」という文化継承主義の立場から、さまざまな研究者と地域住民が協働しながら進めてきた地域文化の再発見、保存と活用のあり方の実践モデルを提示し、グローバル化が進む現代社会のなかでの文化継承の在り方について明らかにした。

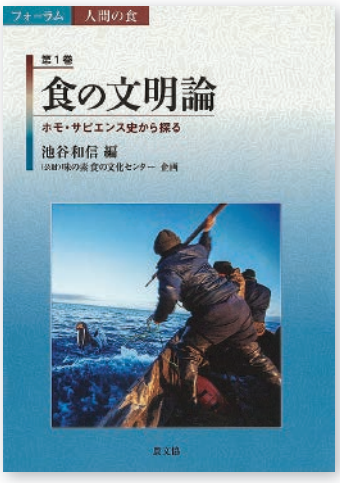


食の文明論
―ホモ・サピエンス史から探る

池谷 和信 編

定価：5,940円（税込） 456頁 農山漁村文化協会
2021年3月30日刊行

30万年という時間、地球という空間のなかで人間の食はどのように見えるのであろうか。本書では、ホモ・サピエンス史の視点から、食材の獲得、調理の技術、共食の意義など、食に対する人類の豊かで多様な叡智を紹介している。なかでも肉食、保存食、食とコミュニケーションなどは、現代文明のなかでの食の問題として論議される。私たちがコロナ後の世界を生きるうえで、人類の食に関する総合智を学ぶことがいかに必要であるのか。本書は、食の根本から人間の未来を考える、学際的フォーラムの成果をもとにした論集である。



新刊の紹介



ヒップホップ・モンゴリア

―韻がつむぐ人類学

島村 一平 著

定価：2,860円（税込） 421頁 青土社 2021年2月24日刊行

現在、モンゴル国ではヒップホップ（ラップ・ミュージック）が大人気であるだけでなく、固有の文化と呼べるくらい進化を遂げている。ヒップホップが支持されるのは、それだけ貧富の格差などの社会問題が前景化しているからである。本書では、現代モンゴルにおける政治・経済・社会的状況、そしてラッパー個人の経験が複雑に絡み合う緊張関係のなかで生み出された世界を丹念に描き出す。人口の10%を切った遊牧民よりもラッパーたちの歌う世界からリアルなモンゴルの現在が伝わってくるに違いない。



ラテンアメリカ文化事典

ラテンアメリカ文化事典編集委員会 編

定価：22,000円（税込） 780頁 丸善出版 2021年1月30日刊行

日々の食卓では、トマト、ジャガイモなど中南米原産の野菜は欠かせない。またカーニバル、フォルクローレ、マチュ・ピチュなど、その名を聞けばすぐにイメージが湧くものも多い。そのわりには、日本からは縁遠いような気分が漂うラテンアメリカ。カリブ海からメキシコそして南米にわたる広大な地域を対象に、古代文明から現代まで、さまざまな民族の営みはもとより、食、宗教、言語、生業、文化遺産、観光、音楽、映画、文学、スポーツ、そして政治、経済、さらには日本との関係など、多角的視点から文化を解説する。

叡智の鳥

川瀬 慈 著

定価：1,760円（税込） 118頁 インスクリプト
2020年12月25日刊行

アジスアベバ、伊江島、読谷村、直島、吹田、フランクフルト、マンチェスター、ストリートから、街の片隅から、森の奥から、悲惨を刻む世界の底から、言葉が、祈りが立ち上がる。映像人類学者による詩・随筆集。著者はこの数年、フィールドワーカーの立場から現代詩や文芸の世界への参入を試み、そこから逆説的に人類学研究のアウトプットの在り方を再考し再構築しようと試みている。本書は2018年から2020年にかけて『新潮』、『翼の王国』、『Subsequence Magazine』などの文芸誌、雑誌に発表した詩、随筆、創作文をまとめたものである。



中東・オリエント文化事典

鈴木 董・近藤 二郎・赤堀 雅幸 他編

定価：22,000円（税込） 826頁 丸善出版
2020年11月15日刊行

中東・オリエント地域は、人類史上、最初に文字文化が開花した地域のひとつであった。さらに、都市の発達にともなって異なった言語を話す異民族が集まってくるようになると、域内の共通語によってより大きな文明的コミュニケーション空間が形成されていった。現代の中東は、イスラーム以降の文明と、イスラーム以前の古代オリエントの文明の二層から成り立っているといえる。本事典は、両者の間の断絶と連続を明らかとしようとする日本で最初の試みである。ワンテーマ見開き完結で、どこから開いても興味深く読める構成となっている。



「ぞめき」の時空間と如来教

近世後期の救済論的転回

石原 和 著

定価：4,950円（税込） 370頁 法藏館 2020年8月10日刊行

如来教は、1802年の名古屋に、熾烓喜之の神がかりをきっかけとして登場した。この時期は、従来の共同体や秩序が崩壊し、それまでの生活が成り立たなくなっていく過程にあった。如来教の動向や思想には、当時を生きた人びとが自らの生に必死に向き合うなかで展開した信仰実践や宗教知識が凝縮されている。本書では、これに光を当て、同時多発的な宗教動向の連環のなかに如来教の歴史的意義を位置づけていく。ここに刻まれた困難な時代に生きた人びとの足跡に、コロナ禍にある私たちの今を生き抜くヒントを読み解くこともできるだろう。



国立民族学博物館の研究

各プロジェクト名をクリックすると詳細情報に移動します。

■ 基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構は、人間文化の新たな価値体系の創出をめざして、国内外の研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進しています。機関拠点型・広領域連携型・ネットワーク型の3つの類型から構成され、本館でもそれぞれのプロジェクトに取り組んでいます。

	プロジェクト名	研究代表者	研究期間（年度）
	機関拠点型プロジェクト／人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築		
開発型	海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化 ― 東南アジア資料を中心に	小野林太郎	2019−2021
開発型	中央・北アジアの物質文化に関する研究 ― 民博収蔵の標本資料を中心に	寺村　裕史	2018−2021
開発型	アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築	飯田　卓	2017−2021
強化型	データベース「焼畑の世界 ― 佐々木高明のまなざし」の国際化と学際研究の展開	池谷　和信	2020−2021
強化型	津波の記憶を刻む文化遺産 ― 寺社石碑データベースのフォーラム型情報ミュージアムへの改良	日髙　真吾	2020−2021
強化型	セネガルにおける諸民族文化の映像記録を題材とする情報強化	三島　禎子	2020−2021
強化型	ミクロネシア文化資料のフォーラム型データベースの構築 ― 20世紀前半収集資料を中心として	林　勲男	2019−2020
強化型	時代玩具コレクションの公開プロジェクト	日髙　真吾	2019−2020
	広領域連携型プロジェクト		
	文明社会における食の布置（「アジアにおけるエコヘルス研究の新展開」内のユニット）	野林　厚志	2016−2021
	日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築（「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」内のユニット）	日髙　真吾	2016−2021
	ネットワーク型プロジェクト		
	北東アジア地域研究	池谷　和信	2016−2021
	現代中東地域研究	西尾　哲夫	2016−2021
	南アジア地域研究	三尾　稔	2016−2021

■ 特別研究

「現代文明と人類と未来 ― 環境・文化・人間」を統一テーマとし、環境、食、文化衝突、文化遺産、マイノリティ、人口問題という課題にかんして、それぞれ3年の研究期間を設定し、国際シンポジウムや欧文での成果刊行を行い、研究を実施しています。この研究を通じて、現代文明を人類学的な視座から再検証することを目的としています。

研究課題	研究代表者	研究期間（年度）
不確実性の時代における家族の潜勢力 ― モビリティ、テクノロジー、身体	森　明子	2021−2023
コロナ禍に対するローカルな対処としての「文化の免疫系」に関する比較研究	島村　一平	2020−2023
グローバル地域研究と地球社会の認知地図 ― わたしたちはいかに世界を共創するのか？	西尾　哲夫	2020−2022
デジタル技術時代の文化遺産におけるヒューマニティとコミュニティ	飯田　卓	2019−2021
パフォーミング・アーツと積極的共生	寺田　吉孝／福岡　正太	2018−2022

バックナンバーのご案内



「民博通信 online」No.1
2020年3月31日発行



「民博通信 online」No.2
2020年9月30日発行



「民博通信 online」No.3
2021年3月31日発行

■ 共同研究

特定のテーマについて、館内外の専門家を数人から20人程度集めて研究会をひらき、成果をあげる研究活動です。　●は館外の代表

	研究課題	研究代表者	研究期間（年度）	
一般	**課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究**			
	現代アジアにおける生殖テクノロジーと養育 ― ジェンダーとリプロダクションの学際的比較研究	白井　千晶	2021－2023	●
	被傷性の人類学／人間学	竹沢尚一郎	2021－2023	
	観光における不確実性の再定位	土井　清美	2021－2023	●
	日本列島の鵜飼文化に関するＴ字型学際共同アプローチ ― 野生性と権力をめぐって	卯田　宗平	2020－2022	
	戦争・帝国主義と食の変容 ― 食と国家の関係を再考する	宇田川妙子	2020－2022	
	海外フィールド経験のフィードバックによる新たな人類学的日本文化研究の試み	片岡　　樹	2020－2022	●
	環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究 ― 人類史的視点から	岸上　伸啓	2020－2022	
	月経をめぐる国際開発の影響の比較研究 ― ジェンダーおよび医療化の視点から	新本万里子	2020－2022	●
	不確実性のなかでオルタナティヴなコミュニティを問う ― モノ、制度、身体のからみあい	森　　明子	2020－2022	
	「描かれた動物」の人類学 ― 動物×ヒトの生成変化に着目して	山口未花子	2020－2022	●
	グローバル化時代における「観光化／脱－観光化」のダイナミズムに関する研究	東　賢太朗	2019－2021	●
	島世界における葬送の人類学 ― 東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較	小野林太郎	2019－2021	
	社会・文化人類学における中国研究の理論的定位 ― 12のテーマをめぐる再検討と再評価	河合　洋尚	2019－2021	●
	人類史における移動概念の再構築 ―「自由」と「不自由」の相克に注目して	鈴木　英明	2019－2021	
	食生活から考える持続可能な社会 ―「主食」の形成と展開	野林　厚志	2019－2021	
	オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究	風間　計博	2018－2021	●
	統治のフロンティア空間をめぐる人類学 ― 国家・資本・住民の関係を考察する	佐川　　徹	2018－2021	●
	カネとチカラの民族誌 ― 公共性の生態学にむけて	内藤　直樹	2018－2021	●
	伝統染織品の生産と消費 ― 文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐって	中谷　文美	2018－2021	●
	心配と係り合いについての人類学的探求	西　　真如	2018－2021	●
	グローバル時代における「寛容性／非寛容性」をめぐるナラティヴ・ポリティクス	山　　泰幸	2018－2021	●
	ネオリベラリズムのモラリティ	田沼　幸子	2017－2021	●
	人類学／民俗学の学知と国民国家の関係 ― 20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス	中生　勝美	2017－2021	●
	文化人類学を自然化する	中川　　敏	2017－2020	●
	課題2：本館の所蔵する資料に関する研究			
	民博所蔵東洋音楽学会資料に基づく日本民俗音楽の再構成と再活性化	植村　幸生	2021－2023	●
	日本人による太平洋の民族誌的コレクション形成と活用に関する研究 ― 国立民族学博物館所蔵朝枝利男コレクションを中心に	丹羽　典生	2021－2023	
	沙流川調査を中心とする泉靖一資料の再検討	大西　秀之	2019－2021	●
	博物館における持続可能な資料管理および環境整備 ― 保存科学の視点から	園田　直子	2017－2021	
若手	**課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究**			
	伝承のかたちに「触れる」プロジェクト ―「3D プリント×伝統素材・技法」のアプローチから	宮坂　慎司	2021－2023	●
	先住民と情報化する社会の関わり	近藤　祉秋	2020－2022	●
	感性と制度のつながり ― 芸術をめぐる「喚起」と「評価」のプロセスから考える	緒方しらべ	2019－2021	●
	モビリティと物質性の人類学	古川不可知	2019－2021	●
	拡張された場における映像実験プロジェクト	藤田　瑞穂	2018－2021	●

民博通信

— Online —

ISSN 2758-0997

No.4
2021

『民博通信 Online』 No.4（旧『民博通信』通巻168号）
2021年9月30日

編集委員
卯田 宗平（編集長）
伊藤 敦規
岡田 恵美
樫永 真佐夫

編集・発行
人間文化研究機構　国立民族学博物館
〒565-8511
大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話：06-6876-2151
https://www.minpaku.ac.jp/

制作
株式会社 遊文舎